

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© The Iken Company, 2000
LICENSED PRODUCT



ヲ多
1569
1-3

相撲評判記序

その小相撲をうけ海を^{カシコキ}畏懼 大内

前會乃一ツもく。天下泰平五穀成

能を初^{ワサ}事^キなり。十^{千ハヤフル}劍破神代乃

性^{ムカシ}古より已ふ此事あり。志^ムくふあふと

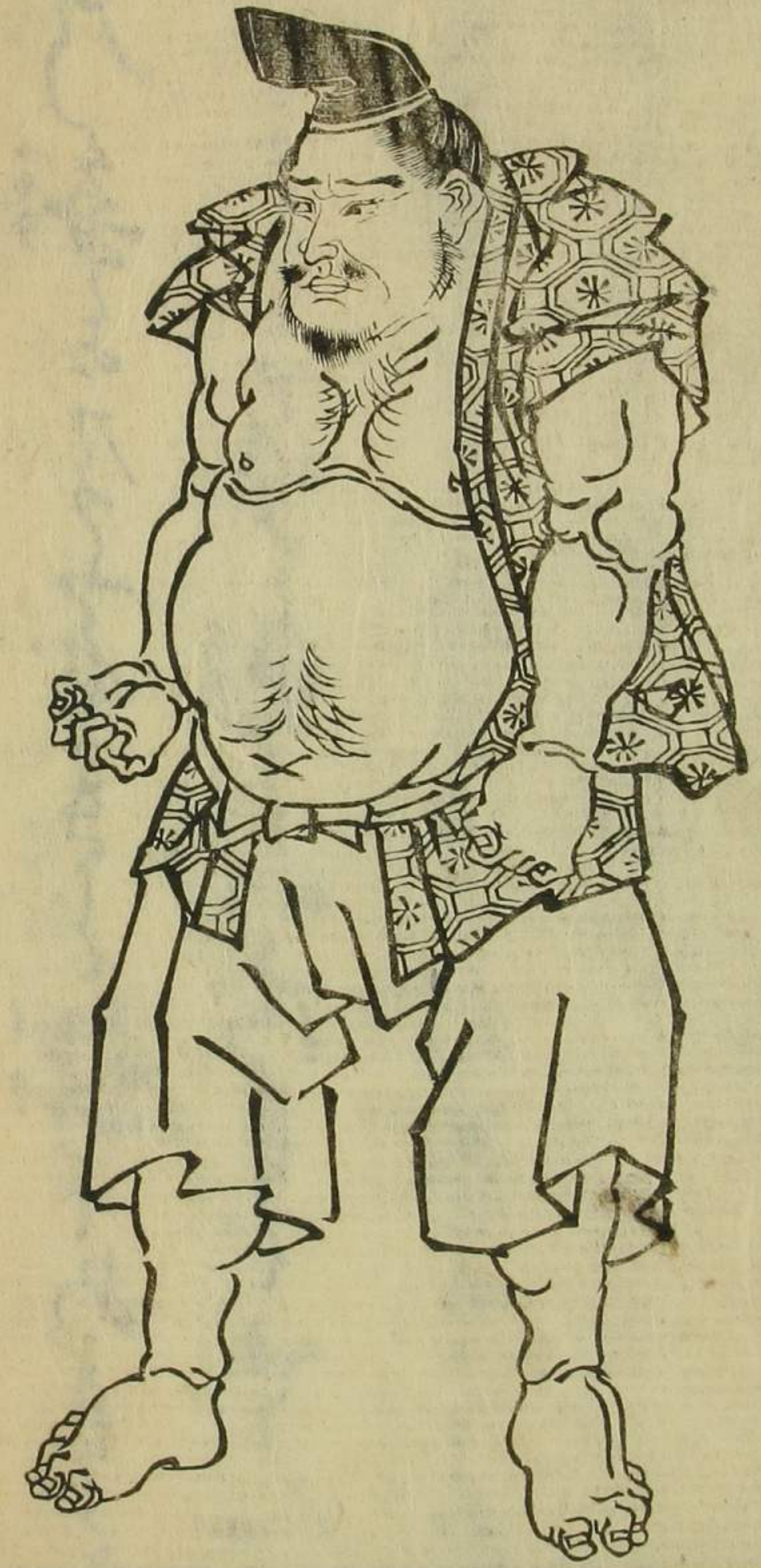
いまご道^キの規矩^キ定まらば



推仁帝の御宇。野見山嶺祿當戸
乃蹶^ケ速^{ハヤ}に猶て上程。始て四十ハもの
法を定め相撲乃規矩を立す。此
是より此道年々小盛なり。普く
諸國小興り也。其勝負之其日
毎に様あふ上。其小盛なり。其事

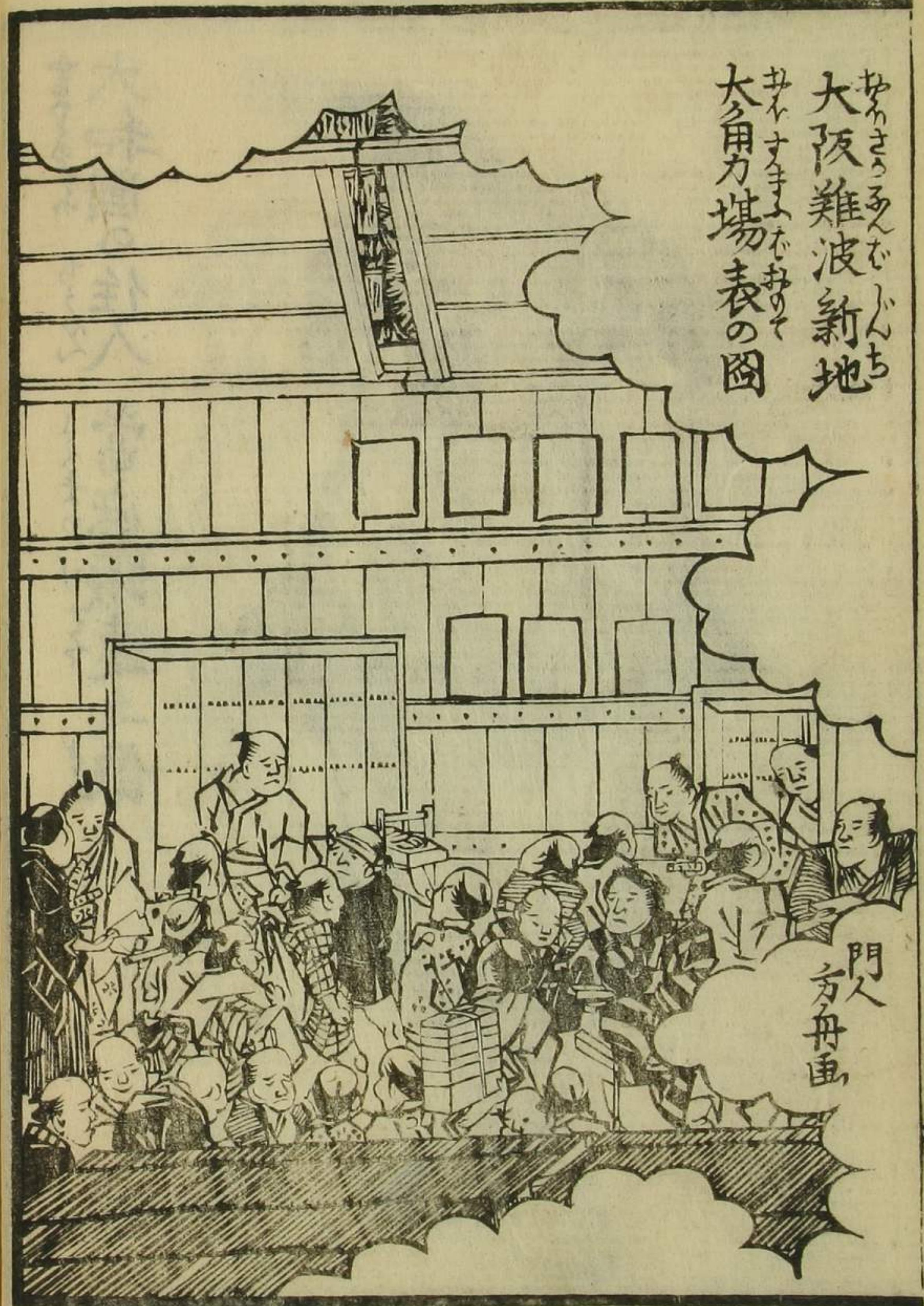
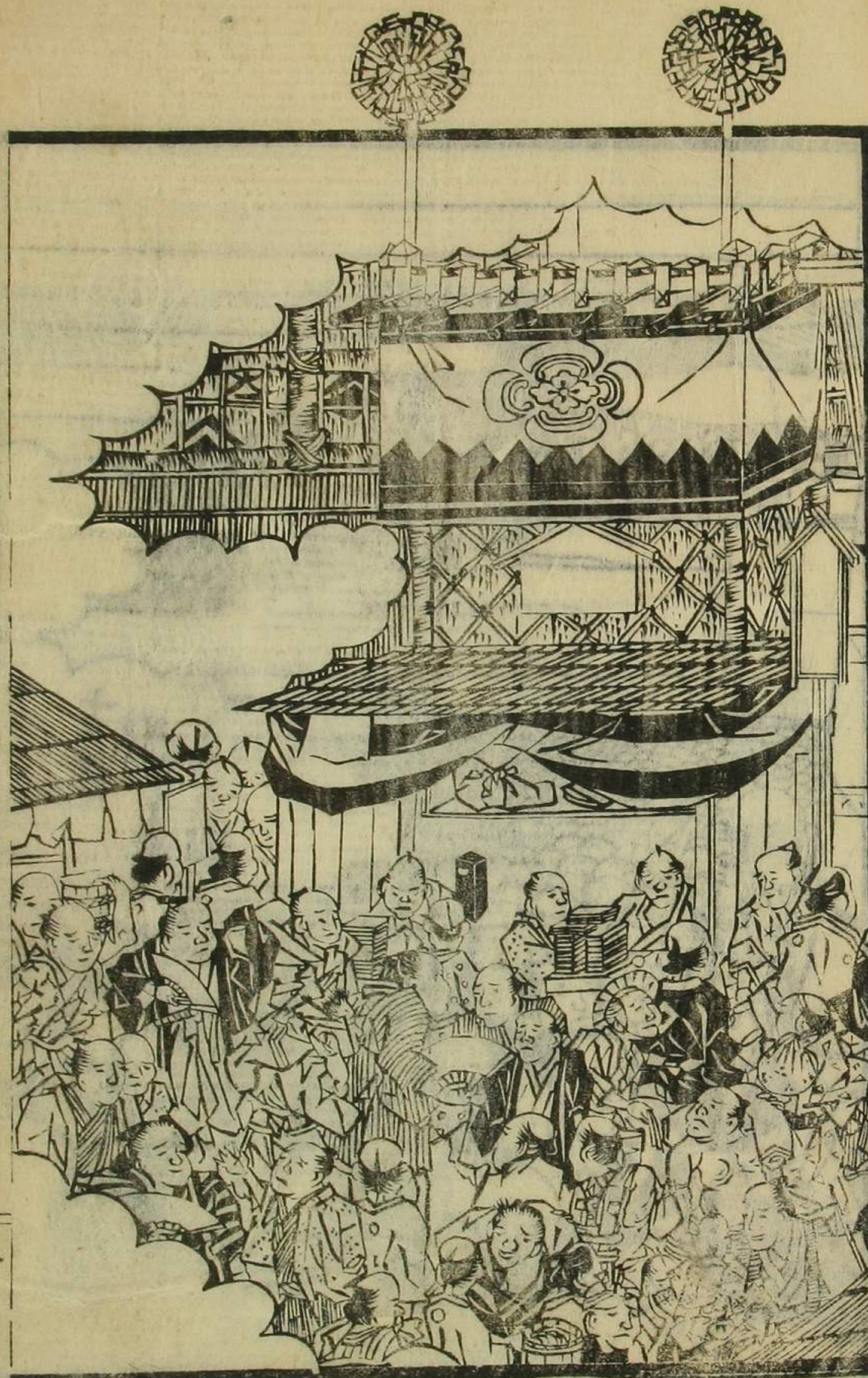
今乃志るや交なり。猶其勝負
小甲^{カウヲツ}にあり。且之を目前^{マノアタリ}にんん人
たしでを知らざる。其勝負
成見ざる人。或は由^{クニ}其見を^{サカヒ}偏^{ヘカテ}する
好^{スキ}くをどそ。いふ少かあるをどおし
ル少^{スクナ}くはるより。其^{コタヒ}度は道不

出雲國の任人 野見宿禰之像
のちのすまみ 後小相撲の祖神と崇祭り
あかめまろ 大野見命と申すと
まろ



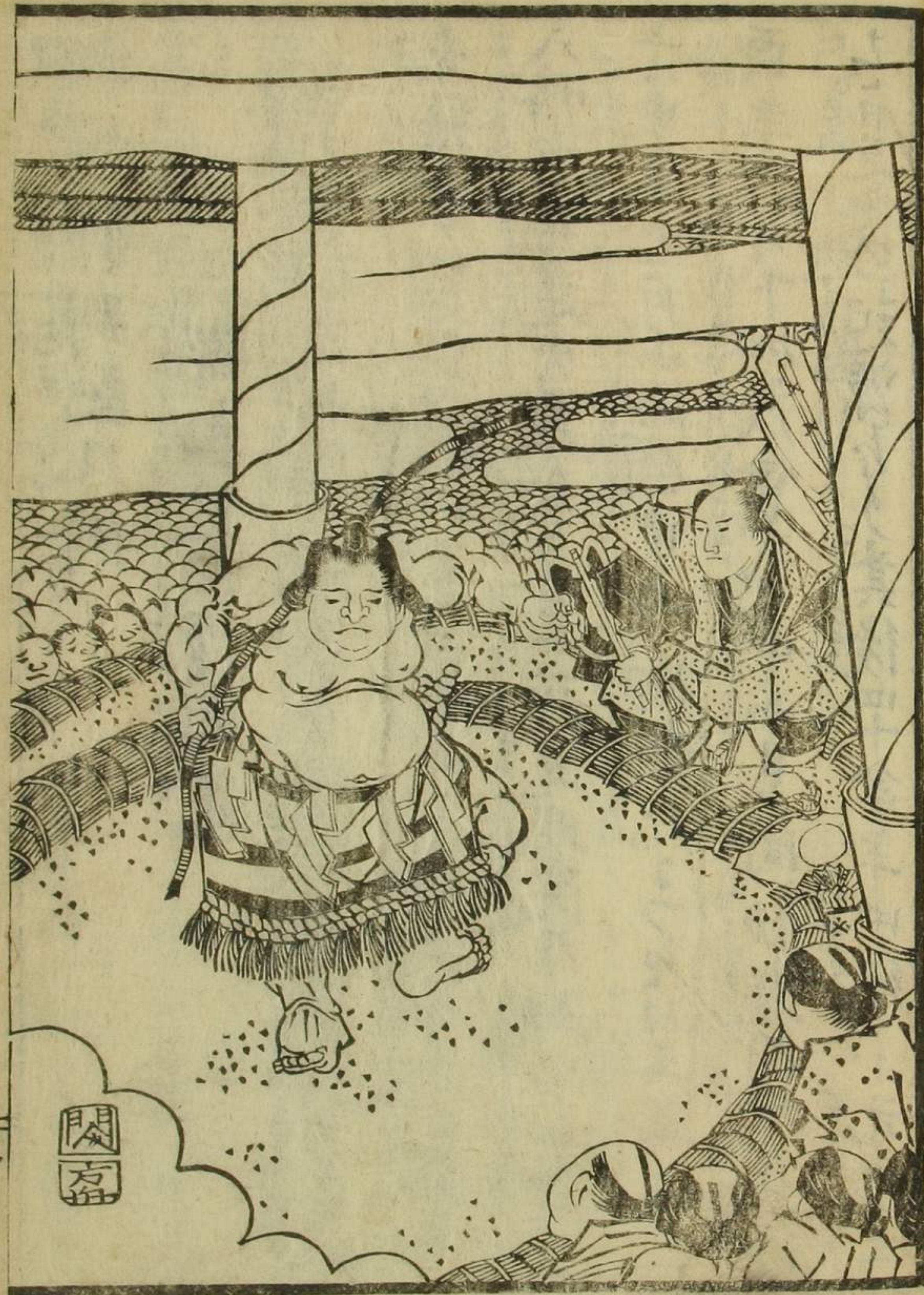
大和國の任人 當麻蹶速之像
あまのつらや





大阪難波新地
 大角力場表の図
サヤナキよお母や

門人
 方舟画



関
方
印



十日目
引合の
図

三六

相撲評判記凡例

三都勸進相撲開基

○京都勸進相撲の開基を愛宕郡田中村干菜山
光福寺 開山より四代目宗圓和尚寺内の鎮守
八幡宮再建あり人皇百十代光明院乃御宇寛永二
十申年十一月御願申上 御赦免まつた翌正保二
酉年六月下加茂會式乃中十日間勸進相撲真行
と日之その起源なり。其後四十余年中絶一元録二

己年山城の國伏見又と淀みく勸進相撲あり日元
録十二年卯年洛東岡崎村洛西吉祥院村ありとあり
も真行あり日年西朱雀村ありとありと之羽立元録十
三年又光福寺八幡宮大破ありた五代目住僧正慶和
尚古例を引勸進相撲御願申上 御免の上此度新
田村赤宮の辺あり晴天七日間真行ありと是世名
高野高野川原の相撲とりと是なり今ふ土俵跡とを
残まり勸進相撲ありとありと二度目の旧地なり其後

みちのまろどのりんのまきやうしやうしやう

人皇百十五代中御内院御宇正徳五未年十月小光福

寺又寺内破損ふつ六代目住僧順栄和尚先く例を

りめく御願申上 御免ふつ六聖正徳六申年小真言が

原小於く晴天十日が間勸進相撲奥行を是より以来

の相撲相續して近年之三条川原あて奥行一年増て

般系栄せり

○江戸勸進相撲の始人皇百十代明正院の御宇寛

永元子年明石志賀之助とい人初寄相撲と名づけ

四谷塩所不於く晴天六日真行せが最初なり其後故

有く三十七年中絶一人皇百十一代後西院御宇寛文元

丑年相撲年寄申合せて御願申上 御赦免有より

絶を相續般系昌せり

○大阪勸進相撲の最初人皇百十四代東山院御宇元

録五申年小袋屋伊右衛門とい人御願申上 御赦免の

上南堀江高基橋通を花通より勸進相撲奥行と

其時乃場所之四十間四方より木戸も四所不有いとどその

のちやん集
 後大山次郎右衛門二度目の勸進相撲 御免を蒙り
 真行し之を中絶せし人皇百十五代中御門院御宇
 享保八年二月大山次郎右衛門 御願申上しふと
 勸進元を定めぬ然せしより今天保七年まで
 一年も怠なく例年十二月廿日 御役所お放し圍を頂
 戴し勸進元を定むる相撲場所も寛政年中より南
 堀江と難波新地兩所となり隔年小真行乃場所を久
 小旧地の堀江へ人家と今と難波新地乃と相撲の

乃場所となり般系昌むり小弥増より

土俵負數古実

土俵を四く伏る妻大極小象より其數四方小四方と
 合て四々十六俵内外二行小伏り都合三十二俵なり然して
 内土俵十六俵の内東西少く二俵退る東西を兩儀
 を象し東戎陽と西戎陰とを右退る二俵の跡と土
 俵の入口とを是を二字口と一鏡小阿云の二字を表と
 ともり外土俵もはく東西少く二俵はくのける内土俵の

残る十二俵いぼろを十二支しおろして外土俵そとの残る十二俵いぼろ八十二
月つきおたろり物ものれども近代略きんごりやして外土俵そとの退のけを内土
俵うちむろりと除のけ其退のける去俵さたよりの腰掛こしりかとせし例れいお
まじも是も近代略りやして水桶みづかをのせる更さらとらかりぬ
何更も近代略りや義ぎヨリ

四本柱古実

四本柱あられを四季しきを表ひやうせると古いにしへの東ひがしを春はるとして昔あとは
絹きぬあく巻ま西にしを秋あきとして白しろ絹きぬ南みなみを夏なつとして赤あか絹きぬ
絹きぬ北きたを冬ふゆとして黒くろ絹きぬを巻まし例れいおれども其後そのちち風流ふうりゆう
の物好ものずかより一様ひとしやうふ赤あか絹きぬ又また毛氈けしん少すくく巻ま其上そのうへを白しろ絹きぬ
給たままら白木綿しろもめん少すくく巻ま更さらとらかりぬ

水引幕古実

四本柱あられの上うへ張た幕まくらと水引幕みづひきまくらと号なづく之これ東西とうざいの力者りきや精せい
力りき成なり励たげまろく勝かち肩かたをいじむ是こゝ陽やうと陽やうと成なり圓まるくは
事ことなり陽氣やうき相戦あひまとれと陽火やうかを生なたると檜ひのちと檜ひのちと
とろ合あととれと火かを生なむとらが如ごとし此理このりをいじ陽火やうか

を鎮むるしづとめ水みづの表ひらと水引幕みづひきまくらとり也なりかろがゆふ
なる時ときも北きたより張出はりだし北きたよりよりおさむ北きたの陰かげ中なかて水みづ
徳とくを主つ王わうと易えい小せうとてと坎かんなり尤なほ縮しゆくの色いろと黒くろなるを
々々れども是これも後世こうせい風流ふうりゆうの好このより色々の縮しゆくを用もちと

幣へい帛お古実こじつ

土依ちよりの中央ちゆうかう小せうなる幣帛へいおの土つちの色いろを表ひらと黄色きいろの紙し
を用もちるる古例これいかりのいままと取とり式しきなり時とき代しろの
結むす乃なり相撲すま小勝せうも関取せんとり小此せう幣帛へいおをある古実こじつかり

さしむ曠あひらの相撲すま小せうちて幣へいをあるる力士りきし襷たすふ幣へいと振ふる
くげて退あひく是これを黄幣わうへいなるなり其その詞こと残のこりて今いま乃なり世よ
まままく驕あうたぐ者ものとと幣へいなるなりもも黄幣わうへいかりともい
かり然しかるる後年こうねん神道しんどう小せうより白紙はくしして作つくるるやふふ
アア

水桶みづか古実こじつ

水桶みづかの往古いやく朝廷てうていの相撲すま節會せちあひ行かむ時ときより是これお
アアして仕下あて是これを主つなるなりより旧記きうきお入いるる今いま勸進くんじん相撲すまお

うせむ依へ出まの例也然れども近代之志どの小畧
式を用るやうふかりしり

弓取の起源

勝相撲小弓をとりしと起源を尋るふ。元龜元年二
月廿五日織田信長公江州常樂寺小於る國中の相
撲より成り召集めとまふ成とせ上覧あり多ふ中ふ
も宮居眼右邊門とり力者ふはぐく對手わたり多れが
藤衣美としく御持弓を賜ふとたり。今テ勸進相撲小結

の相撲小勝とる関取小弓成りしと其余風あり此ふ
後幸ふしりし役相撲と三番わたり関むり藤衣美
成りしと残る二番ふりしびのわれと本意わたりと
代を関ふり。関眼小結小扇子とるしとを更とわり
ぬ此弓とるの更元来武門より起し更由急請取と
一故実作法あるとむつり関取が死小結とるさる時
と其方屋の内より故実小委た力士出たり弓を結とる
かり其外十日目ハ故実儀式多れとも今ハ用ひむ

谷風梶之助像

奥州仙臺の産

初の名ハ

達々關

後ハ

谷風と

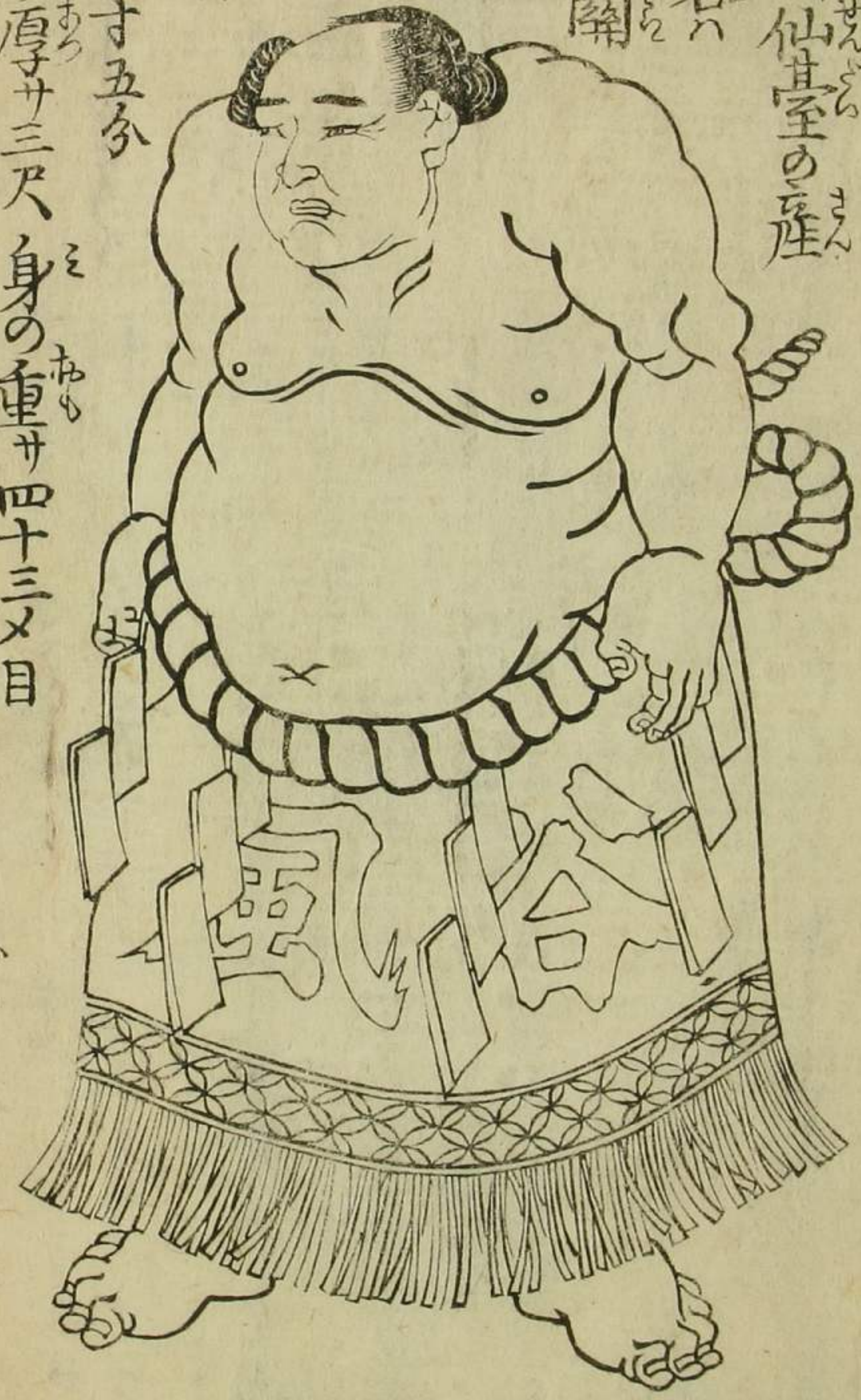
改む

身材

六尺二寸五分

肩の厚サ三尺 身の重サ四十三メ目

色白 眼尖く 古今独歩の関取之始て横綱を許さる



小野川喜三郎像

江州大津の産 初の名ハ相摸川後ハ

小野川と改む

身材六尺五分

身の重サ

三十一メ

目

色薄

赤くして

人品威あり

是も古今未曾有の

関取之横綱を免針



明和年中より安永天明寛政まで乃大開初め達が開後改
め谷風握之助の奥州仙臺の人身の丈六尺三寸五匁重廿四
三有惣身一点の不足なく力量万人小勝を別して相撲
の達人多く腰低く寄る足至く早く。実力力士の階級也
少時も是れ小對する力者なく。適不意成以て稀小
一番勝者も再び向ふ時ハ片手のみく押出さる。寛永の
始より如此万端揃ひ力者なり。茲小江州大津の出生
小喜三郎といふ英童あり。十五才あり大阪の頭取小野川

之助の門人となり相撲川喜三郎と呼時小身の丈五尺八寸
天晴勇剛の美男子なり。後師の養子となり小野川喜
三郎と号す。大阪本中の頭となる。時小身材六尺安永七
成年二十才あり江戸下至彼地の番附二段目の下の小口
小附相撲と二段目の中も強れ者と撰合と小野川
小勝者かく十日とも小勝跋羽三年亥年の相撲おと二
段目の上小附上八人の関取と合せ下より段々勝上り七日
目小大開谷風と合を時小谷風三十九目小野川二十四

目双方形或競まま中々對様乃相手ああまれとも
小野川と生賃業お妙を得呼吸の拍子ととま會と
其終刻ま有形あ如何なる強勇あなりとも緒田まが
えゆる瓜流石本朝無双と称まるる谷風あも急刻まを
を胸あと結田まく暫く挑まと争あひが難あなく谷風あ井
戻あし土俵の外あ押出まし竟ある谷風勝あとまる日九子年
の相撲あ小野川二十三才重廿五番附あ八上段の中あ付て
初日あより段あ取上あ八日目あ又谷風あと立向あ此時小野川

工夫あをあつあくあまあ會あみあ先あをあとりあ。左あ右あのあまあ以あてあ谷
風の乳あ乃あ上あをあ目あ當あみあ刻あまあるあ。雨あのあ手あハあ電あのあ息あ
継あぎあとあ押あまあるあ。それあもあ相手あハあ名あみあああ大兵あとあふ
相撲あのあ達人あもあ急あ押あまあ成あ緒田あ踏あまあるあ透あまあるあ
押あ戻あさんとあ互あみあ争あるあ内あ。小野川あ始あ終あ先手あとあなりあ見
小無双あのあ強敵あとあ土俵あの外あ押出あし天晴あ見あ更あのあ勝あと
なるあ時あ小四方あにあ棧敷あよりあ雨あ乃あ降あ程あ出あるあ花あとあ見物あ
のあ聲あ言あるあ声あ少あ時あ鳴あとあ止あざありあ。此あ後あハあ双方あ互あ角あのあ勝あ

ふ 肩なる 処谷風と病氣あり引菴養生を程なく

病氣本復し寛政元酉年 公方様御上覧相

撲の時小野川谷風まこと立會此角力如何りたる

や双方のまご立上りたる内行司吉田追風谷風に團

み上時小左右の頭取より是ハ如何と処むる小野

川小氣負ありと古事と引 御前と憚り再度の

処中事ものつがう終小谷風勝とわる日三年大阪

角力初り九日目の小野川谷風曠勝負之論組合

霄觸張紙等かかると市中のふ及ぶと近國近在

より結々たる見物雲霞のどくも小廣た場所小亮

満して人の勢せ如くなり斯く段々相撲むまの上中入

後より相撲東方より谷風西方より小野川双方土俵

へ入是れ本朝希代の両闘と左右の力士をいぬ山の如

れ諸見物うづつなぐあ居る。両闘を身構し少時

呼吸を考へ氣を配らるち行司木村玉之助左右の身構

をいそぐ曳と團扇を引や否兩人立上り小野川金剛カと

極く押さるる谷風まつくと踏こく互ふ一世の曠と争ふ
ハ彼唐土の三國乃せ馬超と許褚が挑合も斯や
あゝんと數万乃見物瞬もせどかめ居る内小野川を
氣成厲一勢強く押さくさうも無双乃谷風と東の
上俵除まぐ押付るされども無類の大兵も急吐と一息
力成入又も土俵の中まで押戻を。此時小野川右とさう
左成えりけ列風の如く追廻をも目覚しう巨働あり
諸難なく西の方乃土俵の上まぐまより上押出さんと

あせいとも四三目余の大兵殊小場敷の功者なれむ土俵
成足田と踏とよりえを容易小押切らじ。此も谷風
余りけり追えられ息つたあゝ體の備えぬる氣
早の小野川得たりやと下手成取て曳投小土俵の中へ投
倒し小野川も谷風が上小重り倒る。行司玉五助小野川へ
團扇をさそふ勿心ち東の溜より開の戸八郎次独立此角力
勝負なりと傍若無人ふ云けり。元来小野川丸勝な
まを雲霞の見物大に怒り異日罵谷風開の戸を因

當ふ投つる西丸の皮は雨霰のつち後ハ土俵祭の土と
 とりておつけ東の溜ハ西丸皮と土砂あき埋むりわり
 頭取世話人石残出よつ小是を止む是ハ依て見物ハ
 次第く小唄きども済ぬハ西方乃圍取かり。いづく扱
 ども一山承知せむと大阪頭取乃中も陣幕小野川枝
 川なり小野川ハ別して我子の妻ゆゑ大ハ心配せり。はるの
 頭取玉垣額之助江戸一番の執役上里居て右四人の頭取中
 夜通ふけ合よつ夜の明方おち合此角カ左右

頭取、預りとわらる実ハ古今乃大とめわり

此後小野川と稽古して肩骨と損一カ太おちる谷風の
 一兩年ハ歴て世上一統流行乃風邪おちる死亡を依て
 開東少と其節の流行風を谷風とつひと昔より大
 兵手取數多あれとも此兩雄の如く万事揃る力者有事
 を聞くと美ハ古今の関取かり小野川を後有馬玄番頭
 様乃近臣とかり禄二百石ハ賜る

繫將衣禪の唱誤此事

土俵入の禪とけきき禪といひならむ箱書付目録文
とひかりつるまへ
 通なごも化粧の文字と書、大なる誤なり力士土俵へ
とけきき
 出るふ何と妓女歌舞妓役者此如く化粧だるまを此け
まへ
 志き禪といひ先年ある相撲御好の御大名より御抱の
せんねん
 関取中揃の禪と志め大勢揃て出さる哉御覧なされ御
せんねん
 撥嫌ふ叶ひ見事なる力士も御系装禪の能く揃さる
きかん
 被仰とを貴人の被仰し妻の急り云なううと成
まへ
 御系装禪の袂を志め化粧禪と書、大笑なる事なり
いさね

天保七丙申年九月十一日ヨリ 晴天十日奥行

御免 大阪大相撲勧進元

初日 矢先野佐七

西 立合より双方中志をくくると合
いせ
 ついぬ西方より押出し押出
いせ
 西より引くちとちる
いせ
 若竹

東 初番立合より西方より右とさ
いせ
 二采田め立合より四ツふちり志をくく
いせ
 とく合東方井出引弓う後ち
いせ
 若柳

一詩刊訓

五

西 初番由合より西方より右引こま
かまづかけあて西うち
東 二番め左右より退附あまうくま
とつこ終ふ押出又西うち

荒馬 鈴搦

西 初番由合より北より西より右と
引こまびちげ西うち
東 二番め合より左四つあり合
東より右あて上ままりよりあて東勝

廣瀬川 棒火矢

西 合より左右より押合西より押
ひこて二程うち
東 二番め日く押出二程うち

玉木山 柱

東 二番め合より左右あて合まを
らくも成つて東より押出うち

荒浪 吹上

西 初番右四つあてまを西と西より
ゆも東よりあて付勝負あづり
東 二番め東よりあてづりあては合より
ゆも又西よりあて付勝負あづり

八ツ岩 藤浪

西 初番由合より左四つありあまうく
か合西より右あてまをうあてあて
あまのううち
東 二番め合より双方あてまを合
後東より右とこ押出竹ひき掛

綾ノ戸 付拉

西 初番由合より左四つありあまうく
下まあてあて西うち
東 二番め日く四つありあまうく
西右あてまをうあてあて西うち

若狭川 駒ヶ谷

東西

立合より西よりくまをさつてのち
右四ふかり一むん今くトまをげほ
まゝ滝うち

三ツ濱
白滝

東西

初番立合左四ふかりまをさつて
ま合まをさつてわげまをさつて
二番め立合左リよりまをさつて
まをさつて又まをさつて

誥石
鬼岩

東西

初番立合より左四ふかりまをさつて
まをさつてつひふまをさつて西傍
二番め西より左より押出西傍

玉出嶋
芦之川

西

立合より双方より押合をれより西成

榮嶋

東

双方よりくまをさつて後有つて
引分

矢筈山

東西

立合より双方減りけりまをさつて
後東より右の目入首入たをさつて
まをさつて
二番め左四ふかり内ふけまをさつて
まをさつて死三むめいまをさつて

待乳山
秋津川

東西

立合より左四ふかりまをさつて
右西で上より上よりまをさつて
但一むんまをさつて死れまをさつて

摺墨
雷門

東西

立合四つふかりまをさつて
まをさつてまをさつて
二番め立合よりまをさつて
まをさつて又まをさつて

伊勢松
時津川

二言字詩一

大坂

東西

初より立合より左四ふたりをさす
と合東方おちりかけゆく東より
二よりめ立合より又同じくふちあがり
又東よりあちりち西で林川より

象ヶ峯
林川

東西

初より立合より双方おちり合をさす
と合より左より右より并出り
二よりめ同じく立合よりおちり合双方
より合はる一東方ありて下よりあち
り東より

今津浮
鯉ヶ濱

是より前頭

東西

立合より左より右よりあちり押出り東緒

竹虎
立田山

東西

立合より左より右より双方呼吸と
り合より左より右より立合より
あちりくさるあちり終押出り西方

若虎
生松

東西

双方とも手よりあちり立合より
息とくさるひまどより行司より
あちりくさるあちり合より
津川より左より押出り東より

荒岩
秋津川

東西

立合より左より右より呼吸とくさる
とくさるかあちりあちりくさる
方立合よりあちりあちりあちり
あちりくさるかあちり合より
あちりくさるかあちりあちりくさる
あちりくさるかあちりあちりくさる
あちりくさるかあちりあちりくさる
あちりくさるかあちりあちりくさる
あちりくさるかあちりあちりくさる

松ヶ枝
源氏山

東西

西迫年より東一の北平東ハ場分
の切者こ小大兵大カ力なれなとこいふ
ま合と大いふれまを引とひりく
とま合りあめ石まうまを押し出さ
とま合れども大兵のあらしををり
まを押し出さるまをまをまをまを
まを押し出さるまをまをまを

要石
鳳山

東西

双方まをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを

刺雲
綾川

東西

ま合より左四つあり双方まを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを

朝戸
松ヶ浦

東西

双方ま合まをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを

一文字
天津風

東西

双方ま合より左四つあり
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを

玉川
響野

東西

双方ま合より左四つあり
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまを

二所関
荒見崎

評判記一

七二

東西

双方協力のよきとす殊に大兵大カあるが
息をうぐふと合さくけりくおとくあひ
つらくふむとふたれをその四つありて
おと合しが双方よりあるを相山より
まうりてつひお押しとて東方後と
なる

江戸
日
連
桐山

東西

互合よりつらくまどつてうぐんでハ不
どれ又とせ合し右四つありてさぬ
くも合あつて攻勢力をむけし
ままりてあつて押しせしと和田がさ
ふととまりて去儀とまりつらふ西方
程もつとくおとて左の方へ押しし西も

江戸
荒
和田ヶ原

東西

双方互合をさくひまよりとれしあふ
互合よりあふ本陣をけりくまうりて
これとも大兵とつひまよりとての東方を
をあつらひまてんて左をさくカひま
して押しし綿とち
評子日綿ハ年々みカまより一と評子

日向
平戸
荒木野
錦

東西

双方互合をひくお撲功者の勢風
きよのつをうぐく押し出さんとさく
ふとつとれれとも互攻の強カとさ
大兵の黒岩さくお勢をさくやとカ
まう押しし西方も

江戸
朝
黒岩
風

中入後

東西

初め互合より双方もひくけさく
か合つひふ左方より押しし東も
二むんめ互合より左四つありてさ
か合西方よりさげ出し押しぬるも

伯
柳嶋
桐ヶ嶽

東西

初め互合よりそのあひまをさくひ
あひ後左四つあり西方より上もさ
上もあひし西も
二むんめ日く互合よりと合西方も
たうさくかさくわげめて又西も

大坂
七面山
菊ヶ濱

西 初らん立合より双方をばくちの合
志をくくいと合終押出して東より
二むんめはく立合よりくくちと
又東より押出してをらせのせうち

男石
初瀬野

西 立合より双方をばくち合のく
くちとくく一むん入くまをくく力を
さげまうあるひんくわあるひんく
つひふ四ふわりをくくカ合をれども
ま争うぶつをく左右引く

大坂 駒立
滝音

西 双方をばくちの立合より合より
ふけくくくちの合をばくち右より押出
双方をばくちの立合より南西のくく
押し出くばくち
二むんめ立合よりたき出く叩き投西緒

日向 梅枝
音瀬

是より前頭

西 双方立合よりいらくちとくまき
あひまうまうりく後左四ふあり
中々くくちを合くつま右あて上を
肥後まうりとまうりあけあて
西方うち

大坂 太秦
立物

西 双方立合志をくくひまうりまを引と
ひくく立合たがひんをねをれをす
のち死まもわくあて合をばくち
まうりくちをくくくくま力と
まがまうりあて押し出して西方うち

武隈
縄張

西 立合や志をくく合一双方のれを
合してひくく立合けをくく退つて
まうりくくくくくくくくくくく
くく押し出つひん押し出く東方うち
陣と白雲をばくち撲出積ふより近幸
まうりあてくくくくくくく

二木松
黒雲

東西

互合より双方をけくつろくまどつ
し大蛇が三精力をまげまう押とを
それども小松山之切敷の功者なる上
名をそのまよりたれを是をあし
かてすきとんて左を引まう
こまをけあまう小松山

大蛇瀉
小松山

東西

双方互合よりまををつらあつひま
又ま進まう四車まをまなり働
死なれどもま奴の衆人とよまれことま
強力のま石をれを少くも動せま四
まかり右をよまはまじつ出たけ西指

鱧石
四ッ車

東西

互合や久くあつてま引とま
まあひ双方をけくつろくまどつ
みまどまをれいどまあひつ頂より
よりつれまをけつろくまどつ
東方へまをま

縁松
頂

東西

初日結ひのままをれを双方大ま
まま互合よりまをまどつ
か力まをけま右四ふなり押出ま
と働けまも南同さまの柳をれま
まもまあつまをけ出ま柳指

小柳
四明ヶ嶽

二日目

東西

初を互合より右四ふなりつろく
あつて西よりまをけま
まことまり初を二とまをま
ま山
二を互合より押出ま四方ま

大坂
鳴戸岩
若狭山

東西

互合より左四ふなりまをま
合二を互合よりまをま
つみま下まをけま石ま

大坂
薄雲
石ヶ峯

東 西

立合よりあかしくまされあてもの
あひわくと浪おきのひざりとしこ
かかしくけくさくさくあかしく
二むんの立合ふまき柳よりまき
井よりあかしくまきくさくさくまき
あかしく又かきと浪くさく

サ又キ
川男浪
音柳

東 西

初より立合よりつらつらあかしく
をつらつらつらあかしくつらつら
あかしくつらつらあかしくつらつら
さげかき一松を積くさく

簞先改
北藤ヶ嶽
松鶴

東 西

初より立合ふまきくさくさくあかしく
西方よりあかしく貫きまき
二むんの立合よりつらつらあかしく
又西方よりあかしく貫きまき

イワモ
月ノ戸
貫キ

東 西

初より立合より双方はあかしくあかしく
つらつらあかしくつらつらあかしく
あかしくつらつらあかしくつらつら
あかしくつらつらあかしくつらつら

丸
丸國山
鳴戸泻

東 西

初より立合より双方はあかしくあかしく
つらつらあかしくつらつらあかしく
あかしくつらつらあかしくつらつら
あかしくつらつらあかしくつらつら

丸
平瀬岩
初陣

東 西

初より立合より左四ふわりまきく
右と合ふ方より上まきとて上まき
あかしく山くさく
二むんの立合よりつらつらあかしく
東方よりあかしくあかしく大蛇山くさく

イワモ
大蛇山
鳴ヶ崎

東 西

初より立合よりまきくさくさくあかしく
東方よりあかしくあかしく
二むんの立合よりつらつらあかしく
右よりまきあかしく鉄を積くさく

サ又キ
荒磯
鉄壁

東 西

初を合より双方も合とも合
まがりてつくとあり後四つなり
カ合西方よりつりあげてまげ出し
玉がしるなり
二を合より双方押合西方より
押し出し又玉がしるなり

大坂 荒海
佐中 王嶋

東 西

初を合より左四つなり双方より
五合つり合東方よりさむおかけは
錦山なり
二を合より双方も合後東方より
押し出し又玉がしるなり

アハ 錦山
ヨド 一貫

東 西

初を合より双方けりてあひ
あひハ合又を合なりつくとあひ
よとくたつり合一両双方とも
てれふより初より左を引こる

九坂 楓川
大坂 荒灘

東

合より双方右四つなりさむ
よとくたつり合なり初より左を引こる

大坂 鬼勝

西

合より双方けりてあひ
あひハ合又を合なりつくとあひ
よとくたつり合一両双方とも
てれふより初より左を引こる

サカ 鎧川

東 西

合より双方けりてあひ
あひハ合又を合なりつくとあひ
よとくたつり合一両双方とも
てれふより初より左を引こる

因 向鉄炮
棧

東 西

合より双方けりてあひ
あひハ合又を合なりつくとあひ
よとくたつり合一両双方とも
てれふより初より左を引こる

九坂 大錦
九坂 三ツ木林

東 西

合より双方けりてあひ
あひハ合又を合なりつくとあひ
よとくたつり合一両双方とも
てれふより初より左を引こる

朝霧
甲石

東 初をん立合より双方をけり押合
 志をくくつとあひ終る西方より押
 出してまゝ山なり
 西 二をんめ立合より西方を引く上子
 二をん下子あがりさぞおかけあへ
 又まゝ山なり

樊 噲
 眞嶋山

東 初をん立合より東方より引く上子
 二をんめ立合より西方より引く上子
 二をん下子あがりさぞおかけあへ

鑄 山
 大鳴戸

東 初をん立合より四ツあがりつるくまを
 二をん一後負つるを二をん合へりよく双
 方カとをけりまゝさぞおかけあへ
 二をん下子あがりさぞおかけあへ

瀧ノ音
 象ヶ峯

西 初をん立合より双方をけり上子
 二をんめ立合より双方をけり上子
 二をん下子あがりさぞおかけあへ

今津渚
 松ノ音

東 初をん立合より双方をけり上子
 二をんめ立合より双方をけり上子
 二をん下子あがりさぞおかけあへ

梅ヶ枝

是より前頭

東 立合より双方をけり上子
 二をんめ立合より双方をけり上子
 二をん下子あがりさぞおかけあへ

朝日渚
 藤ヶ嶽

東 西

立合まぢりくは合しを記し列やりの
ひくく立合二つ三つの一してやがて
双方よりつた四つなりを合しして
又わがたはたひのふりあはれまじり
く西の方より上を投りさるる山なり

御咲野
山

東 西

立合まぢりくは合しを記し列やりの
双方よりつた四つなりを合しして
又わがたはたひのふりあはれまじり
く西の方より上を投りさるる山なり

生ノ松
朝尾山

東 西

立合まぢりくは合しを記し列やりの
双方よりつた四つなりを合しして
又わがたはたひのふりあはれまじり
く西の方より上を投りさるる山なり

浦湊
立川

東 西

立合まぢりくは合しを記し列やりの
双方よりつた四つなりを合しして
又わがたはたひのふりあはれまじり
く西の方より上を投りさるる山なり

男鹿山
荒岩

東 西

立合まぢりくは合しを記し列やりの
双方よりつた四つなりを合しして
又わがたはたひのふりあはれまじり
く西の方より上を投りさるる山なり

秋津川
日出山

東 西

立合まぢりくは合しを記し列やりの
双方よりつた四つなりを合しして
又わがたはたひのふりあはれまじり
く西の方より上を投りさるる山なり

鳳山
松ヶ枝

東

立合より志をくくちのあひしが
東方より押出ー原氏山を

西

大坂
源氏山
東雲

東

立合志をくくひきより息をくく
双方立合けくくちのあひたうひ
まらさうくくもさうは左四下成
たがひ小積カとたげきー申々くく
合々れとも持負つるもふよりあ
又々立合を合けー申々つるを引引
又々立合を合けー申々つるを引引

朝ノ戸
繩張

西

立合より双方をのうけ二本松をけー
くうやとそれども四下車これをうけ止
志をくくくくつるをうけ止
志をくくくくつるをうけ止

アキタ
四下車
二本松

東

双方よりやぶさ立合東方よりをけ
くくちのうけ押出えんとそれとも名
あゝあゝまじりの玉川これをあ
らひ志をくくくくあひ終ふ押出
玉川を

九石
荒見崎
玉川

西

立合やまがくくひきより息をくく
とひくく双方立合をけくくちのうけ
まらさうくくあつくとふふよりつれ
西東方より右と引るをうけ
とくくあひて押出ー申々も

ウニウ
黒雲
大蛇浮

東

立合より志をくくくちのあひつる
あつと双方より付右四下ふちりて
西方より志をくくあひつるをうけ
人とよまがくく小松山女も動ふ終
あまはあつと投りー東方を

ウニウ
小松山
駒達

西

東 西

互合者... ひま... 引を...
つふ双方互あひ... 引を...
糸くけ押出... と... なる...
くろけ... の... せ... 人...
ひくく... 押し... 石...

和^{ヲハリ}田ヶ原
鯨^{ヒナ}石

東 西

互合者... あつ... 乾風...
ひくく... 柳も互合... 双方...
あひ... 柳者... の... せ...
と... せ... せ... せ...
押し... 西... 方...

朝^{アサ}風
小^コ柳

中入後

東 西

初... 互合... 押し...
初... 互合... 押し...
あつ... 押し...
押し... 押し...
押し... 押し...

荒^{アハ}熊^{クマ}
大^{オホ}達

東 西

互合... 押し...
互合... 押し...
押し... 押し...
押し... 押し...

桐^{キナ}ヶ嶽^ノ
荒^{アハ}熊^{クマ}

東 西

互合... 押し...
互合... 押し...
押し... 押し...
押し... 押し...

秋^{アキ}ノ嶋^ノ
門^{カド}

東 西

初... 互合...
初... 互合...
押し... 押し...
押し... 押し...

林^{ハヤシ}川^{カハ}
荒^{アハ}川^{カハ}

東 西

初... 互合...
初... 互合...
押し... 押し...
押し... 押し...

鯨^{クジラ}ヶ濱^ノ
駒^{ウマ}達

是より前頭

東 西

立合より双方をげくぐりてきてまをり
くいのとあひまをりよりつれくた四あひ
双方のまをりまをりてあひ合はるり
大熊カとまがまあひおひとねちあけは
あふち

因カ大熊
若柳

東 西

立合より双方けりくをのあひまをり
さぬくあつて後西方よりよりまをり
まをりて井出と要るち
解ふ日るあ石を中あつてまをり
おひまをりあつてまをりあつてまをり

京カ松ヶ浦
要石

東 西

立合まをりくひまをりまをりあふち
双方をけりおひまをりまをりあふち
まをりまをりまをり後西方より右より
すひまがあつてあふちまをり

カラフ玉ヶ橋
荒木野

東 西

立合まをりく息とくあひあひ
ヤウとあひあひあひあひあひ
まをりまをりまをりまをり
方あまをりまをりまをり
てつあつてあひあひ天は風あつち

天津風
連

東 西

立合たかひあつてまをりあひあひ
方はくまをりあひあひあひあひ
おひあひあひあひあひあひ
まをりまをりまをりまをり
二所が関あつち

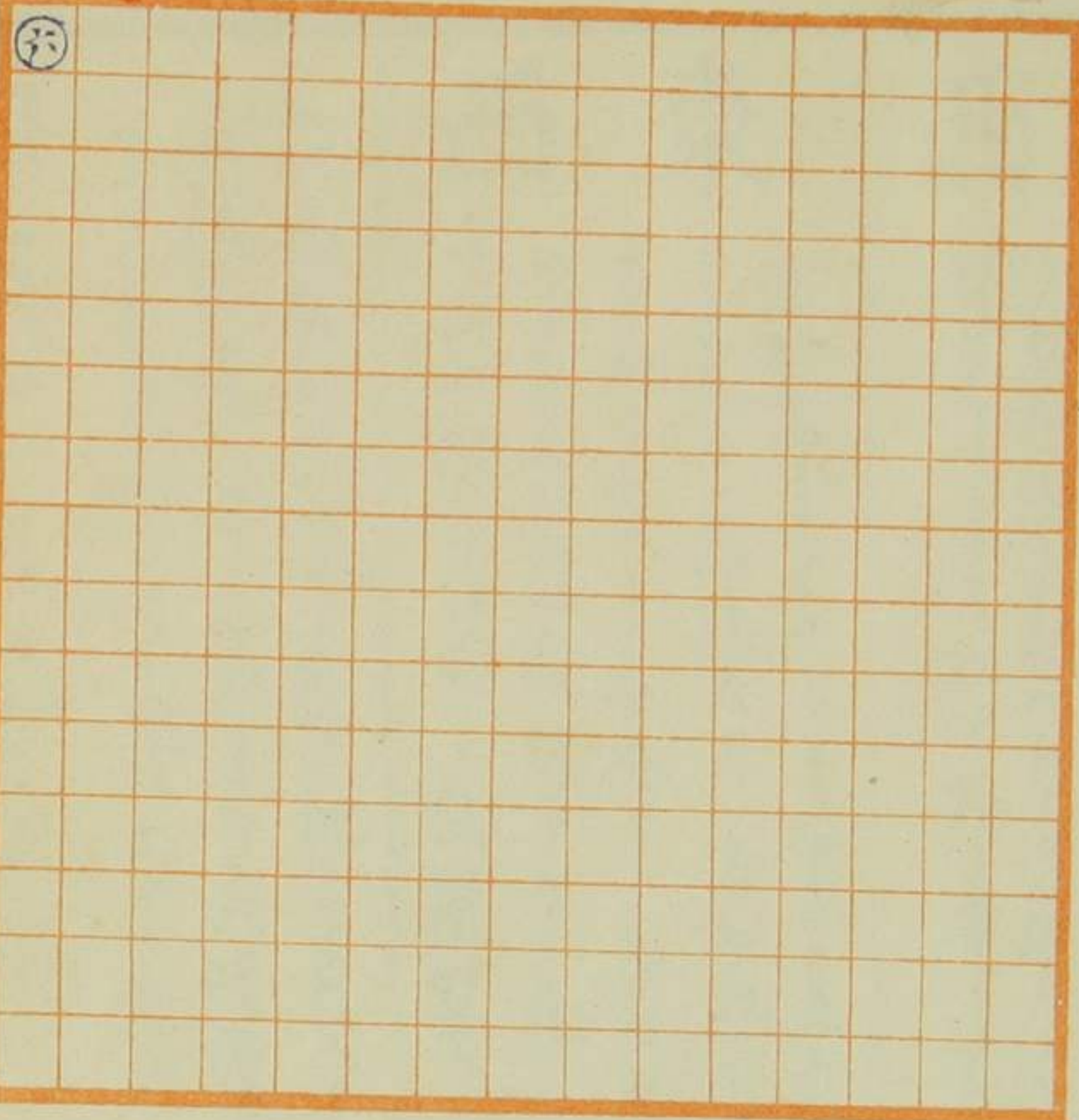
ヒノジ 卿音野
モリヲカ 二所関

東 西

立合より双方けりくをのあひまをり
まをりまをりまをりまをり
けりまをりまをりまをり
まをりまをりまをりまをり
あつて荒破あつち

九カ西明ヶ嶽
荒磯

5年 月



東

双方と死るといふ合さう松力と
まし押くはくもさつく
大兵

言判言

れを
も

双方
の
れく
より付

いられも一世のそれ後有る
化あてさうくハコをむ
一人とまき布の

武^江頂^を
隈

緑^江錦^手
松

東 西

双方と死ねどふ立合まじう松力とまじ
まじ押はしくもまじう一々れども大兵
とらひ大力の綿れれをまじうふれを
うけぢうとせつけうとひくくまじも
まじうまじう松と押あて綿を

手戸
錦
緑
松

東 西

立合まじうひまじう身てまじひ双方
まじわゆるぬ強かまじうれをまじの
まじまじうまじ合くまじまじまじ
まじまじひ後武隈よりまじまじより付
つひふ押ぢげあ一武隈かまじ

頂
武隈

右後負のあうりあを記ととり久もいづれも一世のそれ後負あれハ
土俵の上のまじまじ死なまじ千変万化あまじまじまじまじまじ
あまじまじまじとせし処ハ大中ふあまじまじまじとまじまじ

相撲評判記卷之一終

